

注記：本論考は日本国際問題研究所の見解を代表するものではありません。

ベルギーの対中国交樹立外交と中国国連代表権問題

三宅康之

(関西学院大学国際学部教授)

中華人民共和国成立以来、中華民国（台）、中華人民共和国（中）の双方が「一つの中国」原則を掲げ、一方との国交樹立に際しては他方との関係断絶を求めて相争ってきたことは周知に属し、国連をはじめとする国際機関も重要な競争のアリーナであったことも説明不要であろう。

報告者はこの中（台）と国交樹立を目指す外交を国交樹立外交、中台が国交締結国数を競う活動を国交樹立競争と呼び、その全容を明らかにしようとして取り組んできた。なかでも今回取り上げるベルギー王国の事例は、両国の国交樹立のタイミングと中国の国連加盟のタイミングが重なっている点で非常に興味深く、意義深い事例である。

史料について、中国側外交文書は未公開のままであるものの、幸い、ベルギー外務省文書が近年公開された。当該問題についてベルギー側文書を用いた研究は今回が日本初は無論、おそらく世界初である。ただし、公開されたベルギー側文書だけでは不明なことは多々ある（核心部は未公開であった）ため、米・日・台・仏・英などの関連史料を駆使するマルチ・アーカイヴァル・アプローチにより、国交樹立と国連加盟の過程の解明を試みるものである。

調査の結果、ベルギーと中国の国交樹立過程、そして中国の国連加盟が同日に実現した一因について、以下のような知見が新たに明らかとなった。

中国とはベルギー国民の長期拘束問題もあり、二国間の国交樹立はおろか、関係改善も困難な状態にあった。ベルギーとしては、小国が大国により圧迫される事態は他人事ではなく、中華民国に同情的で、国連代表権問題については一貫して台湾追放に反対していた。他方で、統合が進行中の西欧諸国のなかで孤立しないことも重要な関心事であったことから、ベルギーは台湾支持国がますます少数になっていたことに焦るようになっていた。

66年3月に外相に就任したアルメルは独自の東方外交を進めるなど緊張緩和に関心が高く、ベトナム戦争に批判的であったこともあり、東アジアで新たに紛争が起こることを危惧していた。同外相は中国が台湾を攻撃するリスクを下げるためには、国連に加盟させることで中国を拘束すべきだと考えていた。

折から、外交サークルに多大な影響力を誇った反共主義者のスパークの引退、親台派の首相の辞任および連立政権のパートナーの交代（社会党の参加）など、次第に対中接近の環境が整って行った。そこでアルメルは国連総会での演説を通じて中国にシグナルを送る一方、国連代表権問題についてイタリア主導の特別研究会設置案に協力して事態の打開を図った。その後イタリア案の不採択が続いたため70年夏には独自案を準備したが、各国から支持を得られず国連への提出も断念した。

また、ベルギー側は長期拘束されていた国民の解放を国交樹立の先決条件としていたが、その実現は70年初に不可能と判明したため、国交樹立を先に実現させるべく方針転換を余儀なくされた。第三国における接触を模索した結果、70年7月に実現した駐仏大使を通じた瀬踏みを端緒とし、10月に最初の本格的な接触が開始された。しかしその後中国側が反応せず停滞し、71年6月からようやく前進した。

71年秋の国連総会を目前とした9月13日、アルメル外相は中華民国大使を召喚し、中国承認の方針を伝えた。米国への配慮から国連代表権投票に影響を及ぼさないようにベルギー側は急ぎ、外相がニューヨー

クに発つ前に台湾側の撤収と国交樹立完了を目指したのである。ところが、中国側はベルギー側が呑めない新たな条件を突きつけたため、いったんは11月以降に交渉再開となった。

しかし事態は急転し、10月25日パリ時間15時（アメリカ東部時間9時）に国交樹立が達成された。そしてこの件が同日15時からの代表権問題投票直前の審議開始を控えていた国連の議場に伝わり、同日夜の投票で各国の行動に影響を与えたとされる。

本報告では、このタイミングでの国交樹立となったのは、中国側は71年の国連加盟は可能であっても70年中には無理と判断していた形跡もあることから、中国側に引き寄せられたというよりは、ベルギー側の打算が大きかったと判断する。一つには中国の国連加盟後はさらに条件が引き上げられると予測されたことがあり、いま一つには間近に迫った総選挙への対策として外交成果の欲しいベルギー政権与党の事情から中国の要求をほぼ呑んだ交渉妥結に踏み切ったと理解されるからである。

中国の国連加盟後、日、西独、豪など西側諸国をはじめ中国との国交樹立と台湾との断交の雪崩現象が起き、事実上、国交樹立競争の勝敗は決着した。ともすればニクソンの対中接近ばかりに焦点が当てられがちだが、ベルギーが果たした意外な役割も軽視できまい。小国の内政が結果的に世界史を大きく動かした興味深い事例としてさらなる研究に値しよう。